

乳歯列から混合歯列期までの咬合誘導

品川 光春（しながわ小児歯科医院・佐世保市）

初診時での口腔内診査の結果をみると、乳歯列期においてもすでに種々な咬合および歯列の異常認められる。このような異常に対しては、早期に治療して患児の正常な咬合を誘導することが望ましいが、現実には患児や両親の十分な理解や協力が得られないことが多く、乳歯列期では装置を用いて治療するというよりも、う蝕の治療、予防、保隙、悪習癖の指導が中心となり、定期診査で観察していくという症例が多い。

ところが、永久歯の萌出に伴い、反対咬合、叢生、異所萌出などの咬合および歯列の異常がはっきりしてくると、患児や両親もその治療に強い関心を持つようになる。混合歯列期には、患児の顎の成長に伴い、ダイナミックに歯列や咬合が変化してくるので、その発育がうまくコントロールでき、少しでも正常な歯列や咬合関係を誘導することができれば理想なのだが、現実にはうまくいかないことが多い。しかも実際に各種の装置を使用するようになると、患児自身の協力はもちろん、両親の十分な理解と協力を前提に、技術的および経験的裏付けを合わせもって取り組まねばならないので、大変困難な面が多いが、小児歯科医としては決して避けて通れないのも事実である。まだまだ分析、診断をはじめ、技術的にも未熟な面が多く、常に反省の毎日であるが乳歯列から混合歯列期における咬合誘導処置を積極的に行うことによって、患児の咬合や歯列の異常を少しでも早期に取り除き、正常な咬合を誘導するため、最大限の努力をする必要があると考えている。

今回、幾つかの症例をあげて、その内容を紹介すると同時に、乳歯列から混合歯列期における最も適切な咬合誘導の方法を皆様といっしょに考えてみたい。